

勸進帳（鳴響安宅新関）

富樫「斯様候ふ者は、加賀の国富樫の某にて候。さても頼朝義経御仲不和にならせ給ふにより、判官殿奥秀衡に頼み給ひ、作り山伏となつて御下向の由、頼朝聞こし召し及ばれ、『国々に新関を建て、山伏を堅く選み申せ』との御事にて候。さる間、この所をば某承つて山伏を留め申し候。今日も堅く申し付けばやと存じ候。いかに誰かある」

番卒「御前に候」

富樫「今日も山伏の御通りあらば、こなたへ申し候へ」

番卒「畏まつて候」

旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖や、萎るらん

これやこの、行くも帰るも別れては、知るも知らぬも逢坂の山隠す、霞ぞ春は恨めしき。

厭はず事の成就を、方々配慮あるべし」

と、仰せに

皆々『ハッ』とばかり、君の御運の拙きを、思ひ量つて顔見合はせ、無念と落とす涙の雫、安宅の関の道芝に、朝露置きし如くなり。

『かくては果てじ』と弁慶は氣を取り直し、

弁慶「いかに強力、疲れはさこそ今一息、氣を励まして歩むべし。いざ通らん」

と諸共に、関の方へぞ立ちかゝる。

弁慶関の戸に声を通じ、

弁慶「いかに関守殿、御役目御苦勞千万。我々同行の山伏通行致したし。いざ開門あれ」

と言ひ入るれば、

番卒共は口々に

番卒「すは山伏の来たりしとか。いで召し捕へ」詮議。方々来たれ」

と、立ち騒げば、

弁慶「こは粗忽なり関守達。何故あつて開門もせず、召

鴻門楯破れ、都を後に義経公、馴らはせ給はぬ旅姿、身は山伏の強力と、袖の篠懸露霜を、いつを限りと白雪の、越路の春に急ぐなる（合）御心根ぞ、痛はしき。

さて御供の人々には、

伊勢の三郎、

駿河の次郎、

片岡八郎、

常陸坊、

弁慶は先達の姿となりて行く空や、

海津の浜も、踏み分けし芦の篠原波寄せて靡く嵐の激しきは、花の安宅に着きにける、花の安宅に着きにける。

義経公辺りを見廻し、

義経「いかに弁慶、かく行く先々に関所を設け、山伏を堅く選むとあれば、所詮陸奥までは思ひも寄らず。名もなき者の手に掛からんよりはと、覚悟は疾くに極めたれども、その方が謀めを用ひ、かく新客に形を替え、木にも草にも心を置く、微運の我が身。実にや思ふ事儘ならぬこそ浮世なれ。我れはいかなる困難も、

し捕らんとは狼籍千万。子細いかに」

と尋ねれば、

番卒「ホ、その子細といつば、頼朝義経御仲不和とならせ給ひ、義経公は作り山伏となつて、奥州の御館秀衡に頼り給ひ、下向ある由聞し召し及ばれ、かくの如く諸国に新関を構へ、堅く詮議を仕る」

番卒「たとへ真の山伏にもせよ、修験者に限り堅く通路成り難し。たつて関を通るとあらば、一命にも及ぶべし。足元の明い内、真の山伏といふ証拠を置き、早や／＼を立ち去られよ」

弁慶「ハ、委細承りて候。ガそれは『作り山伏をこそ留めよ』との仰せなるべし。真の修験者を留めよとの仰せにてはよもあるまじ」

番卒「あゝらむつかしの問答無益なり。一人も通す事ならぬ」

番卒「ならぬ」

番卒「ならぬ」

番卒「ならぬ」

番卒「ならぬ」

番卒「ならぬく」

と高呼ばり。

富樫「ヤレ暫く待たれよ。富樫之介正広、それへ参つて糾さん」

と、衣紋正しく立ち出でて、関の外面に打ち向かひ、

富樫「ノウく客僧達、我れは当所の関主、富樫之介正広と申す者。先刻よりの押し問答、つぶさに聞き取り申したり。今、貴僧の詞によれば、勅命を承つて、日本六十余州を勸進せらるゝとのこと。左程尊き客僧を追つ立てんも心なし。ことに山伏の真偽を選む役目なれば、承りたき子細もあり。定めし、勸進帳を御持参ならん。願はくは、聴聞の致したし。イザ、勸進を召されよ」

と望む詞に

弁慶は、『ハツ』と思へど、さあらぬ体、

弁慶「ハ、仰せに従ひ、只今読み上げ申すべし」

と、笈の〔倉〕内より往來の巻物取り出だし、

へ勸進帳と名付けつゝ、高らかにこそ読み上げけれ

弁慶「それ、つらく、惟れば、大恩教主の秋の月涅槃の雲に隠れ、生死長夜の永き夢を、驚かすべき人もなし。こゝに中頃の帝聖武皇帝と申し奉るは、最愛の夫人に死に別れ給ひ、追慕の情止み難く涕泣の御涙渇く時なし。かるが故に上求菩提のためとして、廬遮那仏を建立し給ふ。しかるに去んじ寿永の頃、兵火のために焼亡し畢んぬ。斯程の靈場絶えなんことを嘆き、俊乗坊澄源、普く諸国を勸進す。一紙半銭といへども、奉財の輩は無比の樂しみを極め、当来にては九品蓮台の上に座せん。帰命稽首、敬つて申す」

と、天へも響けと読み上げたり。

富樫「ホ、勸進の趣意承つて殊勝に存ずる。某も心ばかりの寄付仕らん。ヤアく者共、布施物これへ持ち来たれ」

『ハツ』と心得士卒共、持ち運びたる白木の台、加賀絹袴その外に多くの布施物取り揃へ、御前にこそは並べけれ。

富樫「いかに先達殿、我れ幼少の頃よりも仏陀を帰依し、多くの聖に逢ふ度毎、その宗門の旨を聞けり。しかるにいまだ先達の如き名僧に逢はざる故、修験の法の委細を知らず。今、我が尋ぬる趣を一々お答へ下されうや」

弁慶「ホ、いしくも問はれし関主殿。愚僧が心得あるかどは、残らずお答へ申すべし」

富樫「ホ、早速の御承知過分に存ずる。さらばお尋ね申すべし」

弁慶「しからばお答へ仕らん」

と、互ひに形改むれば、

義經主従息を詰め、『様子いかゞ』と守りゐる。

正広膝を進ませて、

富樫「いかに先達。そも、世に仏徒の姿種々ある内に、山伏達の異形の姿は、いかなる子細に候ふぞ」

弁慶「それ、修験の法といつば、胎藏金剛両部の旨を修し、嶮山惡所を踏み開き、世に害をなす惡獸毒蛇を退治して、難行苦行の功を積み、惡靈亡魂を得脱

成仏させ、天下泰平の祈禱を修す。表は降魔の相を顕はし、惡鬼外道を降伏さす。これ神仏の両部にし、百人の伊良太加数珠に仏跡の利益を顕はす」

富樫「してまた袈裟を身に纏ひ、仏徒の姿にありながら、頭に頂く兜巾はいかに」

弁慶「オ、即ち兜巾は、五智の宝冠にして、武士の兜に等しく、十二因縁の髻を据えてこれを頂く」

富樫「して篠懸の因縁は」

弁慶「これぞ九会曼陀羅を表す」

富樫「黒き脚絆は」

弁慶「胎藏界の黒色なり」

富樫「八つ目の草鞋は」

弁慶「八葉の蓮華を踏むに象る」

富樫「して山伏の出で立ち」

弁慶「即ちその身を、不動明王の尊容に象るなり」

富樫「出で入る息は」

弁慶「阿吽の二字」

富樫「ム、さてまた寺僧は錫杖を携ふるに山伏修

験の金剛杖に、五体を固むる謂はれはなんと」

弁慶 「ことも愚かや金剛杖は、天竺檀特山の神人

阿羅々仙の持ち給ひし靈杖にて、胎金両部の功德を寵めたり。釈尊いまだ瞿曇沙弥と申せし時、阿羅々仙に給仕して難行の功を積み、御名も照普比丘と改めてこの金剛杖を授かり給ふ。かゝる靈杖なればこそ、我が祖先役の小角、これを用ひて山野を経歴し給ふなり。まつた杖に切れ目を入れたるは、地水、火風空、木火土金水を象つたり」

富樫 「して仏門にありながら、帯せし太刀はたゞ物を脅さんためなるや、真に害せんためなるや。これにも謂はれ、あるやいかに」

弁慶 「オ、これぞ柴打ちと名付け、我が中興の聖大峰山に入りし時、深山幽谷を切り開き、御山に住む毒蛇を退治し成仏させたるその功德、まつた王法仏法に害をなす者は、一殺多生の理によつて、たちまち切つて捨つるなり」

富樫 「ム、眼に遮り形ある物は切るにもせよ、もし

まだこの外にお尋ねの筋あらば、一々お答へ申すべし」

と、澱み濁らぬ弁舌に、

富樫を始め

並みある士卒、皆一同に舌を巻き、感じ入つてぞ見えにける。

富樫 「ハ、ス程尊き客僧を、暫しも疑ひ申せしは、某が不念。あゝら恥づかしや畏れあり。いざ布施物を御受納下されなば、某が悦びこの上なし」

弁慶 「ハ、ア、こは有難き大檀那。現当二世安樂、なんの疑ひあるべからず。こは重ねてお頼み申したきは、我々は近国を勧進して卯月半ばに登るべし。嵩高き品々は、それまでお預け申し置く。鏡一面砂金一包みは受納致さん」

富樫 「ホ、成程、御尤もなる御頼み、委細承知仕る。いざいづれも、心置きなくお通りあれ」と赦しの詞に

先達は、

形なき陰鬼陽魔が王法仏法に障碍なす時は、何を以て切り給ふや」

弁慶 「ホ、無形の陰鬼陽魔は、九字の真言を以て切斷せん」

富樫 「ム、して九字の真言といふはいかなる義かや、事の序でに問ひ申さん。サ、サ、サ、いかにく」

弁慶 「ウ、ム、その九字の真言は、我が宗門の秘密なれども関守殿の懇望黙し難く、いざ説き示さん、サつぶさに聞かれよ。それ九字の真言は、臨兵闘者皆陳烈在前の九字なり。まさに切らんとする時は、正しく立つて齒を叩くこと三十六度。右の五指を以て四縦を描き、後に五黄を書き、急々如律令と呪する時はあらゆる五陰鬼煩惱鬼、惡魔の類は言ふも更なり。惡鬼外道、死靈生靈、忽ちに亡ぶること、霜に熱湯を注ぐが如し。実に元品の無明を払ふ大利劍、莫耶の劍もなんぞ及ばん。兵家がこれを用ふる時は、敵に勝つこと疑ひなし。元より九字は法華經の内より選み給ふ妙文にて、その徳、広大無量なり。

弁慶 「こは有難し」

と一礼述べ、

弁慶 「いでく方々急ぐべし」

と詞に

銘々打ち連れて、しづく関を通りける。

遙か下つて強力は、悩める足を踏み締めながら、後に続いて出で行くを、

富樫 「強力待て。イヤサ新客待て」

と、聞くより皆々『ハッ』とばかり、『すは我が君を怪しむるは、一期の浮沈極まりぬ』と皆一同に立ち帰る。

弁慶 「ア、暫し、慌てゝ事を仕損ずな。ヤイ強力め、早く通りをらぬか」

と叱り付くれば、

富樫 「ア、イヤ、あれはこなたより留めたり」

弁慶 「ム、何故あつて止められしぞ」

富樫 「サ、さればこそ。あれなる新客、九郎判官」

弁慶 「ナニ」

富樫 「デハハ、ハ、サ義経殿に似たる故に止め申す」

弁慶 「ム、すりやあの強力が、判官殿に似たるとな」
富樫 「いかにも」

弁慶 「ハ、ハ、ハ、ヤイ新客の強力め。日高くば能登の国まで参らうずると思ひしに、僅かの笈を負ふて後に下ればこそ、関守殿に怪しまれ、修行の邪魔なす奇怪者。惣じてこの程より何に付けても教へを背く憎い奴。エ、エ、エ、い物見せてくれんず」

と、金剛杖を追つ取つて、情け容赦もあらばこそ、背骨腰骨嫌ひなく、散々に打擲し、

弁慶 「いかに方々、賤しき強力が成敗に、御身達の太刀刀を借らんより、この杖にて打ち殺さば、彼も成仏致すべし」

とまた打ちかゝるを

富樫 「ヤレ暫く、それにて心中の疑ひ晴れ申したり。我れ等の不明は新客の災難。偽りならぬ先達の真を見るその上は、鎌倉殿への恐れもなし。早やく通行致されよ」

弁慶 「こは有難き関主殿のお詞。ヤイ強力め。大檀那の

仰せなくば、打ち殺しても捨てんずもの。命冥加に叶ひし奴、以後をきつと心得をらう」

と、鋭き眼に睨め付けたり。

富樫之介は突つ立ち上り、

富樫 「我れは猶も嚴重に警固をなし、義経殿を詮議致さん。いかに客僧、またの再会、いざさらば」

弁慶 「さらば」

富樫 「さらば」

と言ひ捨て、関の彼方へ入りにける。

後に皆々安堵の思ひ、

一同 「またもや事のなき内に、いざ急がん」

と関守に、暇を告げて主従は、関を遙かに。

弁慶 「へ先の関を早や拔群に程隔りて候ふ間、この所に暫く御休みあらうずるにて候。皆々近う御参り候へ」

一同 「心得て候」

常陸 「いかに申し候。さても只今の気転、さらに凡慮よりなす業にあらず」

駿河 「たゞ天の加護とこそ思へ」

伊勢 「関の者共君を怪しめ、生害限りありつるところに」

片岡 「とかくの是非を問答はずして」

常陸 「我が君を助くること、我々の及ぶところにあらず」

一同 「驚き入つて候」

弁慶 「それ、世は末世に及ぶといへども、日月いまだ地に落ち給はず。危き難を逃れたるも、全く君の御武運を神明仏陀の守護ある印。ハ、ア有難しく。さりながら敵を欺く計略なれど、正しき君を強力とするさへも冥加至極と思ふ上、杖にて主君を打つ咎めの空恐ろしき天罰を、受くべき我れは厭はねど、御痛はしき御身の果てと、思へば上げしその杖は、幾千貫の鼎より遙かに重き心地して、日頃鍛へしこの腕も、痺れる如く覚えしぞ」

と土にひれ伏し三拝九拝、君を敬ひ奉りつひには泣かぬ弁慶も、一期の涙ぞ殊勝なる。

富樫 「ノウく客僧達。某先刻各々方へ聊爾を申せし段、役目とはいひながら罪多くして面目なし。それ故にこそ御後慕ひ、粗酒一献勧めたく、これまで持参致したり。いざいづれも盃を廻らせ給へ。早や疾くく」

と勧むれば、

武蔵坊心得て、

へ実にくこれも心得たり。人の情けの盃を請けて心を取らんとや。これに付けてもなほく人に、心なくれそ呉羽鳥。怪しめらるゝな、面々と弁慶に諫められて、この山蔭の一宿りに、さらりと円居して

所も山路の、菊の酒を飲もうよ。

へ面白や山水に

面白や山水に、盃を浮かべては流に引かるゝ曲水の、手まづ遮る袖触れて、

へいざや舞を舞はうよ (合)

元より弁慶は、三塔の遊僧、舞ひ延年の時の和歌、これなる山水の落ちて巖に響くこそ (合)

へ 鳴るは滝の水

弁慶 「食へ酔ひて候ふ程に、先達お酌に参つて候」

富樫 「食へ候ふべし。いかに先達、とてもことに二差し御舞ひ候へ」

弁慶 「さらば舞はうずるにて候」

へ 鳴るは滝の水 ㊦

へ 鳴るは滝の水

日は照るとも絶えずとうたり。『疾くく立てや手束

弓、心赦すな関守の人々。暇申さんさらばや』と、笈を
押つ取り肩に打ち掛け、㊦

虎の尾を踏む毒蛇の口を今こゝに、逃れ出でたる心地し
て陸奥の国へぞ

(2025. 11. 27)